

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように  
群馬の教育や文化の話題をふだん着のままで紹介するシリーズ



# はっぴいクラスのこどもたち 桐生市立天沼小学校特別支援学級

## 特別支援教育の現場取材しました

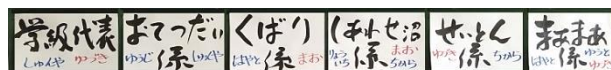
最近、自閉症スペクトラム、アスペルガー症候群、学習障害（LD）などの言葉をよく耳にしますが、その実態はどのようなものなのか、またそれらと向き合う教育現場とはどのようなものなのかはよく知られていません。今回は、桐生市立天沼小学校（取材時は三井雅彦校長：4月からは大美賀信文校長）の特別支援学級（担当は高橋保先生、稲村先生、橋本先生、中野先生）取材して、皆さまに報告します。登場する児童の名前は全て仮名です。また、子どもの人権に配慮する観点から、写真を加工してあります。

## 赤城山から吹きおろす寒風

2014年度も残り1ヶ月を切った3月2日（月）、桐生市中心部から北西部にある桐生市立天沼小学校を訪問しました。東武鉄道、わたらせ渓谷鉄道相生駅が近く、児童数は500人あまり。静かな住宅街にありました。私たちは2時間目が終わったところで到着。車から降りると、赤城山から吹き下ろしてくる冷たい風が頬をさし、思わず背を丸める取材陣でしたが、20分ほどの休み時間に入った児童たちは寒風も何のそのとばかりに、元気に縄跳びをしていました。

## 特別支援学級は「はっぴいクラス」

校長先生にご挨拶をした後、教室へ向かうと教室の入り口には「はっぴい1組」と標識があ



り、中には元気な児童が9人、なにやら2年生のかつあき君が体育帽子を持って教室を出ようとしています。すると高橋先生が「ジャンケンジャンケン」といいながらジャンケンが始まり、高橋先生が負けると「はっぴい2組」担任の稲村先生がやり、それも負けるとはっぴい介助員の橋本先生がやりましたが、いずれも負け。再度、稲村先生がやってやっと勝ちました。どうやら普通学級の体育の授業に出たかったようで、ジャンケンで認めるか否かを決めていたようです。実は、この場面から支援学級の正に日常の姿が始まっていて、この30分後くらいにちょっとした事件が起きました。（はっぴいクラスの児童たちは普通学級の授業に出ることもあります）

## 「卒業生を送る会」の練習中に

3時間目の授業は、「卒業生を送る会」の練習です。9人が横一列に並び、ハンドベルやリコーダーを持って演奏が始まりました。かつあき君はちょっと離れた所に立ってハンドベルを手にしていましたが、あまり乗り気ではありません。高橋先生は次々とエレクトーンで曲を弾き、みんな元気に楽しく歌っています。

気づくと、かつあき君の姿がありません。やはり体育の授業が気に入りそちらへ行ったようです。

## 6年生の誓いの言葉

そのうち6年生から中学校へ進学する誓いの言葉が始まりました。ニコニコ顔のけんいち君は、「ぼくは健康に注意して、元気な中学生になります」と言いました。次にまきちゃんが、「中学校へ行って一生懸命勉強して調理師免許をとりたいです」と言いました。次に、まさや君が、「中学校で頑張っている人を助けられる人になりたいです」と言いました。そして、3人そろって「相生中学校へ行っても頑張ります」と宣言しました。思わずジーンと来てしまいました。



「中学校に行ってもがんばります！」

## かつあき君のトラブル

こうして練習が終わり、この後も高橋先生の伴奏で歌が続きます。2年生のみよちゃんは歌も踊りも大好きなのか身体を大きく動かし楽しそうです。なにやら廊下で先生が慌ただしく動いています。かつあき君が戻ってきました。体育の授業に出たのですが、何か事件があったよ

うです。

4時間目は算数です。始まる前に、高橋先生からかつあき君のことについて説明がありました。「クラスの子からうんこと言われたんだって。でも相手を殴ることはしなかった。だけどガラスを蹴って割っちゃんだよね。」と話をすると、まきちゃんが「怪我は無かったの」と言いました。暖かい空気が流れたように感じました。

子どもたちは、それぞれが自分の所属する交流学級をもっています。そこで他の子どもたちと一緒に過ごしたいという気持ちをもっているのでしょうか、うまく行かないことも起こります。さまざまなトラブルを経験するたびに、はっぴいクラスでそのことを振り返り、学校生活を豊かにする学びを経験しているのだと感じられました。

## 計算ドリルで

### 「人間だれにも失敗はあるよ」



稲村先生はヘマをしました！

A3のプリントが配られ、両面にびっしり問題があります。表裏合わせて72問です。「 $4 + \square = 10$ 」のように、 $\square$ のなかに数字を入れていきます。稲村先生がストップウォッチを持って時間を計ります。「用意始め！」の声で、一斉に計算が始まりました。30秒ほど経ったところで、高橋先生が「ストップ。やり直し。稲村先生がスタートを押してなかった」と言うので「エー何で」と声があがりました。「みなさん、稲村先生は大人なのにヘマをしました」と高橋先生が挑発的に投げかけると子どもたちから稲村先生を応援する言葉が掛けられました。6年生のまさや君が「人間だれにも失敗はあるよ」とフォローの声。またまた暖かい空気が流れました。

やり直しとなり、新しいプリントが配られました。先生の失敗もみごとに教材になりました。

## 教え合うこどもたち

1回目の時も猛烈なスピードで鉛筆を走らせていた4年生のたかし君は、やり直しとなった2回目も猛烈なスピードで計算をしています。たかし君「終わった」、稲村先生「37秒」、高橋先生「オー！新記録。」次々に「終わった」の声にタイムが告げられていきます。6年生のまきちゃんは3分過ぎてもまだ終わりません。4分を過ぎたところで「終わった」の音がかりました。1年生のすすむ君は苦戦しています。すると終わった子たちの3～4人がすすむ君のところへいき、あれこれとアドバイスをしています。3回目もたかし君は猛烈な速さです。「終わった」「36秒」「オーまた新記録。」高橋先生はニコニコしながらパソコンに打ち込んでいきます。テンポのよい進行に充実感が満ちていました。

## 読経のような答え合わせ

答え合わせが始まり、高橋先生が空のペットボトルで手を叩き、「3、5、7、2、6、5、8、3、1ポンポン・・・」とお経をあげるように数字を言っていきます。答え合わせのテンポをもっと速くという声があがりました。新記録をつかったたかし君です。すると「いいよー」とみんなの声。学年の違う子どもたちですが、

9人が一つになった学習集団になっています。

## 仕上げはメロディーに合わせて

プリントでの計算が終わると、高橋先生はみんなをエレクトーンの前に集め、メロディに合わせて「♪3と〇は10ですよー」「♪8と〇は10ですよー」と順番に答えさせていきます。(〇のところをすばやく数字を言う)間違えると黒板に書かれた名前の下に正の字の線が引かれていきます。算数が得意なたかし君は「繰り上がりもいいよ」というので「♪8と5は」と問題を変えます。数の概念がなかなかつかめない子どもたちにとっては大変だと思われそうですが、楽しさが伝わってきます。

## 給食の時間に自己紹介

4時間目が終わり、給食の時間です。私たちも一緒に食べました。自己紹介に入ると、のりと君は自分のことをアスペルガーとASD(自閉症スペクトラム障害)と言い、算数にはまっていると言っていました。すすむ君は電車が大好きで大抵の名前は言えるようです。まきちゃんは歴史物の読書が好きで、紫式部などと言っていました。高橋先生が「まきは調理師になりたいんだよね、お兄ちゃんがこの給食を作っているんですよ」と教えてくれました。まきちゃんは食器を片付ける時、私たちの後ろを通る際に、「後ろを失礼します」と丁寧な言葉遣いで通っていました。



給食を食べながら取材陣もふくめて自己紹介

## この子どもたちのどこに発達障害があるのだろう

午後、高橋先生からお話を聞くことができました。まず「この子どもたちのどこに発達障害があるのだろう」という私たちの率直な疑問に答えてもらいました。どこにでも普通にいる子のように見えたからです。先生によれば、歌や踊りでは満面の笑みで楽しそうに踊っていたみよちゃんは、状況判断ができないと固まってしまい、通常学級の中にいられなくな

ってしまうそうです。他の子ども、馬鹿にされたり悪口を言われたりすると、物を投げつけたり、傷つけたりしてしまうことがあるとのことでした。取材時にそのような姿が見られなかったのは、はっぴいクラスでの人間関係が彼らに大きなストレスを与えないからであり、小さなトラブルには先生方がその場で支援の手をさしのべるからだとのことでした。

## 集団の中で育つ子どもたち

授業の中で時折、高橋先生から「ばか」といった声が飛び出しますが、ここには高橋先生の長年の蓄積から作られた確固たる指導理念がありました。子どもたちは日常的にこのような差別的な言葉を投げつけられています。明るい声で投げかけてやることで彼らの抵抗力とうまくやりすごす力を身につけさせようという意図なのです。

また「情緒障害のある子は個別指導ではうまくいかない。集団のなかで指導し、社会性



すすむ君のまわりに集まる子どもたち

を持たせることが必要なのです。発達障害の子は冗談が言えるようになると生活しやすい。冗談が言えることは人を信じられることだから」という言葉も印象的でした。

## 「ザ☆連絡帳」と「しあわせ沼」が家庭と学校を結ぶ

「計画よりも記録が大事」の言葉を裏打ちするように、親への連絡となっている「ザ☆連絡帳★」には、ほぼ毎日のように子どもたちのことが書いてあります。忘れ物や学習内容の到達点、健康観察などがきめ細かく書いてあります。子どもの写真もいっぱいです。

また学級通信「しあわせ沼」も充実しています。昨年5月のNO. 8では「はっぴいやろう事件」と題して暴力について書いています。はっぴいのA君は弟のB君とけんかになり「はっぴいやろうが」と言われました。このことを通して言葉の暴力について考えさせています。

「はっぴいのAちゃんは、Bちゃんとけんかみたいになったとき、Bちゃんから『はっぴいやろうが！』といわれたそう。その話を聞いたとき私はAちゃんに聞いてみた。『ねえ、Bちゃんとけんかみたいになって、Bち

ゃんにはっぴいやろうがって言われたんだって？』Aちゃんは『うん、言われた』と言った。それで私はAちゃんに『ごんねんだったね』と言うと、Aちゃんも、『うん、ごんねんだった』と言った。以前のAちゃんだったら、きっとばかにされたと思って、なぐっていたと思う。でもAちゃんは毎日毎日毎日いろいろな体験をしてきたので、とっても成長してきたのです。はっぴいでは暴力事件が起きると、たいていまさや君はこう言います。『暴力すると自分の方が悪くなるよ』とるものもとれなくなるよ』。そうすると、他の子ども『そうだよ』と言いますが、ついうっかり暴力をすることの多いたかし君まで『そうだよ』と言います。そして、まきちゃんは『言葉で解決する方がいいよ』と言うと、まさや君は『何をされたか言えば、みんな聞くよ』と言います。」

## 教育は正しい代表者を選べるようにする力を育てること

高橋先生はこの後、日本国憲法の9条を使って暴力では解決できないことを教えています。まきちゃんやまさや君の言葉はこうした背景から出ているようです。この通信の最後はこんな文章で終わっています。

「はっぴいでは『それじゃ頭にくるよね、でも暴力はダメだよ』という言葉もよく出ます。はっぴいの子たちの中には、目の前で暴力を見たり、されたり、ばかにされたり、はずかしい思いをさせられたりしている子も多いのです。でも、はっぴいの教室の中では平和をめざしています。はっぴいでは平和を感じているだろうと思います。『友だちが暴力でやられていたら暴力で相手をやっつけて助けなければならない』と考えている人は、ほ

んとうの平和をつくることはできません」

「ザ☆連絡帳★」や「しあわせ沼」には憲法の条文だけでなく、子どもの権利条約や児童憲章がいろいろな場面で出てきます。刑法までも出てきます。

最後に高橋先生の実践レポートからの文章の一節を紹介します。

「教育は正しい代表者を選べるようにする力を育てること、更に言えば、平和を実現する正しい代表者になれる力を育てることです。もちろん、みんなが代表者になれるわけではありませんが、どんな事態になっても、自暴自棄にならないで、命や平和の大切さを忘れない子どもたちを育てることが平和につながるのです。」  
《文責：須田章七郎》

## 自閉症が世に知られるようになったのは 高橋 保

### カナーとアスペルガー

自閉症が世に知られるようになったのは、怒鳴りつけても罰を与えてもどうしても命令に従えない兵隊さんがいるということだったと思います。カナー（Leo Kanner, オーストリア生まれの児童精神医学者 1894 - 1981）という人がそれを発表すると、同じようなタイプだけれど言葉を上手に話す人もいるということのアスペルガー（Hans Asperger, オーストリア生まれの小児科医 1906 - 1980）が発表しました。

### パソコンの機能と人体の機能

今ではASD＝自閉症スペクトラムということにくくられて、便宜的にアスペルガータイプ、多動優位型ADHDタイプなどと呼んで、およその対応の手がかりにしています。パソコンで言うところのプロセッサー、メモリー、ハードディスク、キーボード、センサー、ディスプレイ、スピーカーなどは人の体の機能に対応するところがあります。キーボードやセンサーなどの入力装置は感覚器官で

しょう。メモリーは海馬などの一時記憶と関係が深いと思います。プロセッサーで一時記憶をつなぎあわせたり、ある条件にあうものだけを選び出したりします。処理された情報を記憶したり、様々な情報を蓄積して利用に役立てるのがハードディスクの役割であり、それぞれの機能に「個人差」があります。人



間でもたくさんさんのことを覚えられ人、すぐに忘れる人、刺激に対して敏感な人、のんきな人などいろいろです。これまでは、どれだけたくさん覚え

られたかということが重要な「学力」の目安でしたが、近年、統合のスピードが注目されるようになりました。

## 情報統合作業に個人差がある

しかし、さまざまな情報の中から必要な情報を瞬時に統合するという作業には大きな個人差があることが考えられます。統合に時間がかかる場合には、濃い霧の中で車を運転するような不安感や恐怖感があるでしょう。十分情報が統合されないうちに行動するならばブレーキのない車のような状況になります。

## 特性を知って対応すれば

比喩や誇張などを整理して、相手の言葉の裏にある気持ちを感じ取って適切に対話をするなどということには大きな困難があることが想像されます。たとえばアスペルガータイプの子は、情報統合に苦手があるけれども、決まったパターンを身につけたり記憶したりすることが得意ですから、テストの「成績」の非常に高い子もいます。しかし、「本当のことしか言えない子」などとして、対人関係を悪くしてしまう子も少なくありません。一番の友だちの子に「あなた、性格悪いんだってね。みんな言ってたよ」などと本当のことを教えてあげてしまって関係を悪くします。しかも、そういう特性を理解しないで、テストの点数がよかったりすると憎しみも倍増です。小中学校では、アスペルガータイプの子の

かなりの部分が不登校になるケースが多く、それなりに深刻な問題というとならえ方が定着してきましたが、教師集団が特性を知って対応することでかなりのトラブルが防げるようになります。ただ強調しておきたいのは、排除するために「あの子はアスペルガータイプだ」などというのであってはならないと思います。アスペルガータイプで成績のよい子もつとしまわせになるための援助をするために、そうした知識を活用したいのです。

## 高校でも必要な特別支援

小中学校では、特別支援学級や通級指導教室でそうしたタイプの子たちがトラブルを避けて職業生活などを行っていきけるような援助や情報提供をしています。こうした営みは、高校でも必要なことと思いますが、高校の中に特別支援学級を置くという発想はあまり出てきませんでした。大きな集団が苦手な、問題行動を起こしてしまうような生徒が入学選抜で排除されてしまうということもあるでしょうが、選抜を通して高校生活に入っている生徒もいるでしょう。彼らにも、社会に出るから特性が不利益にならないよう、対人関係やコミュニケーション能力に関する支援を行うべきではないでしょうか。

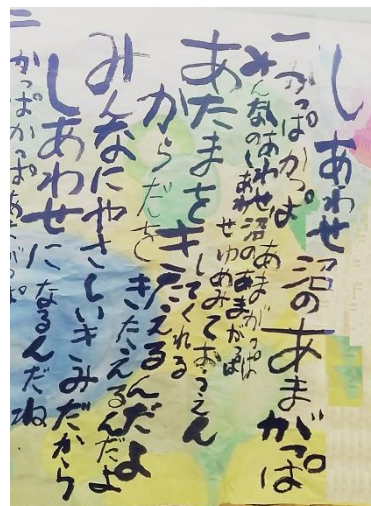
【教室に貼られた木版画】



## 取材を終えて

前号に続いて特別支援教育の現場への取材になりましたが、やはり衝撃の連続でした。発達障害の問題の重大さについて考えさせられ、同時にまた、正しい知識を持って子どもたちに接することで確実に子どもたちの成長を支援することができるという事実にも目を見開かされました。筋書きのないドラマを演じるような教職員のみなさんの準備や努力は大変なことと思います。お忙しい中、私たち取材班を快く受け入れて下さった、みなさんに、また原稿を寄せて下さった高橋先生に心よりお礼申し上げます。

《取材・撮影：須田章七郎・瀧口典子・倉林順一》



学級歌は高橋先生作詞作曲